

### 19. 老年者不整脈例における Rate-responsive Pacemaker の適応に関する検討

鈴木康子, 藤森尚子, 上田慶二  
(東京都養育院附属病院)

(目的) 血行動態を中心に, 老年者における心拍数と AV synchrony の意義, rate-responsive Pacemaker の適応について検討した。

(対象・方法) ペースメーカー植え込みが必要な6例について, 体外ペースメーカーにて AAI (又は DVI) と VVI モードにて心刺激を行い, 肺動脈圧, 心拍出量, 血圧を測定した。

(結果) AAI モードでは全例においてペースングにより心拍出量は増加したが, VVI モードではペースング前に比し低下する例も認められた。心拍出量は, AAI モードでは VVI モードに比し Pacing rate 60/分で平均26.9%, 70/分で平均29.2%高値を示した。AAI, VVI モード共に, Pacing rate 60/分に比し70/分で心拍出量は増加した。以上より老年者においても AV synchrony, 心拍数の増加が血行動態に影響を与えることが示され, 生理的ペースングが有用であると考えられた。

### 20. 僧帽弁逸脱症候群に伴う不整脈についての検討

依光一之, 鈴木 勝, 竹内信輝  
(旭中央)

当院にて昭和54年より昭和60年の間に超音波検査を中心として僧帽弁逸脱症候群と診断した55例につき不整脈を中心として検討した。多彩な心電図異常が認められたが, II, III, aV<sub>F</sub> の ST-T 変化, いわゆる poor R wave progression 不完全右脚ブロックの他に期外収縮, 房室ブロックなどの不整脈が多くみられた。不整脈については His 束心電図, ホルダー心電図も施行し少数ではあるが重症な伝導障害のあるものが認められた。また不整脈と心機能低下との間には必ずしも関連を認めなかった。

僧帽弁逸脱症候群の患者の管理上不整脈についての検索が重要と思われた。

### 21. 左室流入動態による生理的ペースングの検討

高田博之, 前田 岳, 岡部昭文  
澤田 準, 傳 隆泰, 加藤和三  
(心臓血管研究所)

DDD 型 pacemaker を植込んだ房室 block 患者4名を対象に, 心室 pacing (V)・心房心室順次 pacing (A-V) での左室流入血流動態・左室拡張様式を, 超音波

pulsed doppler 法 (D), RI angiography (RI) を用いて検討した。Dでは僧帽弁輪部での急速流入期ピーク血流速 (R), 流入血信号の包絡曲線の時間積分値 (I) を, RI では1/3 peak filling rate (PFR) を測定した。心拍数80では, DにおいてRはVで有意に高値を示し, IはA-Vで有意に増大した。RIではPFRはVで高値を示した。即ちA-Vで流入血が多いが, Vでは急速流入の増大で心房収縮の欠除による流入血減少を代償する機序が働いていた。又正常洞調律のRIをも施行した1例では, PFRはVよりも良い値を示し, 左脚ブロック型収縮では拡張様式にも変化をきたす可能性が示唆された。

### 22. 等尺性負荷による左心機能の評価

神山善隆, 鈴木康子, 入江邦隆  
高橋道子, 杉山吉克, 中村 衛  
(谷津保健病院)

正常群8例, 高血圧非心肥大群14例, 高血圧心肥大群5例 (いずれも未治療), Ca拮抗薬使用群5例, Ca拮抗薬βブロッカー併用群4例について, ハンドグリップによる等尺性負荷を加えて, 血圧, 心拍数, STI, Mモード心エコー図, 心拍出量を測定して左心機能の評価した。収縮能の指標としてET(c)/PEP, 心拍出量, LVDdとLVDsの変化を用い, 拡張期の指標として最大左室容量拡張速度, 心房充満率を用いた。いずれの指標も高血圧群, 特に心肥大群で低下がみられた。また, Ca拮抗薬使用群の血行動態は正常群に近づく傾向がみられた。ハンドグリップ負荷法は, 高血圧心の左心機能の評価する上で有用であると考えられた。

### 23. 中高年者の健康感・運動習慣と運動耐容能

稲次潤子, 久保田頼子, 吉崎 英清  
山崎行雄, 清水正比古, 山田憲司郎  
(エアロビクスクリニック)

中高年者の運動耐容能と自覚的健康感及び日常の運動習慣との関連を調べた。

対象及び方法: 当施設にて健診をうけた30~69歳男性132名について Balke 法を用いて自覚的 maximum treadmill 負荷を行ない, 運動持続時間より運動耐容能で評価した。自覚的な健康感と運動習慣は健診前に記入された問診表より調査した。

結果: 中高年男性の運動耐容能は,

- (1) 自覚的健康感が「大変よい」群は, 「劣っている」群より高かった。
- (2) 運動習慣について, 努めて歩いている群は歩い